

令和7年度 教育研究発表会 質問回答集

○ 自律的な学習者を育てる上で、教師がどの程度まで介入するべきか

⇒各教科の単元を実施する際に目指す探究レベルに応じて、介入の度合いが変わってくると考えられます。探究レベル1～2においては、教科特有の思考方法や知識・技能等の定着に向けた介入をし、探究レベル3～4においては、活用につながる介入を目指します。

○ 探究レベルを各教科で行う際の留意点（一步間違えると総合に寄った授業になりかねない）

⇒探究レベル1～4は、各教科の特質を生かした「教科学習としての探究」であり、総合的な学習の時間とは明確に役割を分けています。特に、教科固有の見方・考え方を働かせ、各教科の学習内容や知識・技能を活用して課題に迫る点が重要です。レベル5（真正の探究）は教科を超えるものであり、これを総合的な学習の時間（FT）で担うことでバランスを保っています。

○ フロンティアタイムについて、設定したテーマの探究が進まない生徒に対して教師（チューターの先生）はどのような手立てを講じているのか。

⇒「どこでつまずいているのか」「なぜうまく進まないのか」を生徒と対話しながら整理します。そのうえで、問い合わせの内容をもう一度確かめて焦点をはっきりさせる（問い合わせの焦点化）、情報をどう集めたらよいかを一緒に考える（情報収集の方向づけ）、考えが行き詰ったときに、別の見方から考え直す（仮説の立て直し）などの支援を行います。

また、探究の進み具合を整理するために、定期的に小グループでの進捗状況を確認する場を設定したり、3年生から2年生に対してアドバイスを行う場を設定します。

○総合学習の時間において、「テーマ設定」が各校で苦慮するところではありますが、附中ではどのように教師が介入しているのか。どのような視点で助言、指導を行っているのかを教えてください。

⇒最も重きを置いている手だけでは、生徒の興味・関心に合ったテーマになっているかを教師との対話を通して確認していくことです。2年間続けることのできるテーマになっているか、上手くいかないときも粘り強く探究できるか、楽しむことができるかを重視して対話をしています。対話の中で、教師のもっている知識を提示したり、生徒の発言に対して問い合わせたりすることで、生徒の興味・関心を深掘りしテーマに繋げていきます。

また、「探究テーマチェックリスト」をもとに、複数の教員にテーマを確認してもらい、探究内容の質を担保しています。

○以前文科省研究開発学校（小学校）新たな教科などの設定や教科の再編に関する研究の最終報告会に参加した際にも出ていた質問なのですが、公立学校で実践するに当たり授業時数的に可能かどうか、学校でFTに取り組むことでのデメリットがないか（何かの時間を削っていたり、一定の教科の力が下がってしまったり）、また附属福岡中学校では実際にどの程度の時数をFTとして活用しているのか予算がどのくらいかかるのか知りたいです。

⇒第1学年では、40時間を探究学習に充てています。それに加え、10時間のキャリア学習を行い、計50時間の総合的な学習の時間を実施しています。

第2学年では、48時間を探究学習に充てています。それに加え、22時間をキャリア学習と修学旅行に関する内容として実施しています。

第3学年では、45時間を探究学習に充てています。それに加え、25時間をキャリア学習（進路に関する内容、大学見学等）として実施しています。

また、生徒によっては、総合的な学習の時間内では探究できない内容もあるため、夏休みや秋休み、週末等の時間を活用している生徒もいます。

○ 探究レベル1～4の各教科での実施について、学校や学年全体として、バランスを調整したり、どの探究レベルが徐々に上げていくのか、単元や本時レベルによっても設定が違ってもいいのか知りたいです。

⇒学校全体の探究レベルのバランスやレベルの上げ方については、実践を通して模索している最中です。

単元や本時によって探究レベルの設定が異なることもあります。例えば、単元全体では探究レベル4を設定しているが、一次や二次の段階で探究レベル1～2の授業をして、探究の土台となる学習内容を習得させる。という単元構成も考えられます。

○ フロンティアタイムにおける小グループの分け方について教えてほしいです。グループでも可とすると、自分の探究ではなく、仲の良い生徒同士でグループを作る可能性があるのではないかと思いました。

⇒小グループは興味関心・テーマ領域の近さを基準に教員が調整します。初期段階では生徒の希望を取り入れつつ、後にテーマ軸（例：福祉・環境・教育など）で再編する場合があります。目的は「仲の良さ」ではなく、多様な視点の協働を生むことにあります。チューター側から意図的なグループピッキングを促すことを心がけています。

○ 探究学習において、生徒の課題に応じた専門家の方々を準備した方法が気になりました。どのような問い合わせてくるかは生徒次第なのでそこからどうやってあれだけ生徒の助けになる専門家の方々を見つけたのか興味があります。

⇒専門家の方は基本的には生徒自ら探してきます。教員は、生徒が探してきた専門家が探究テーマに適切かを判断したり、専門家が見つからない生徒に対して選択肢の提示をしたりしています。また、今年度より「フロンティアタイム人材バンク」を創設しております。今年度協力いただいた外部の方や保護者にアンケートをとり、継続して探究に協力いただける方をまとめています。その中から、生徒のテーマに合う専門家を教師がピックアップしています。

○ 探究学習を進めるにあたり、先生方を対象に行われた研修があれば教えてほしいです。

⇒全体会（松原先生による講演会）の中でも実施されたように、職員全員で授業動画を視聴し、探究レベルについての議論をしたり、探究レベルを変化させるためには、どのような手立てが考えられるかを検討したりする研修を行いました。

○ 探究活動において、とことんやる子と、自分の興味も何か分からず、なかなかやれない子の二極化の状況もあるとのお話しがありました。

なかなか自分ではやれない子に対して、具体的に、教員ができる支援は、何かあるのでしょうか。もし何か支援をされているならば、場面ごとで具体的な手立てを教えていただけると幸いです。

○ 教員は、教科の専門家ではありますが、探究活動においては、どのように進めるとよいのか、分かる教員は多くはないと思います。一方で、子どもたちの発表は、オリジナリティのある発表ばかりでした（原因を追究している生徒もいれば、物をつくっている生徒もいました）。どのようにして、生徒を導かれているのでしょうか。どの教員も適切な助言をすることができるようになるために、どのような方法をとられているのか気になりました。

⇒「テーマ設定」の段階では、生徒がどのようなことに興味をもっているかの書き出しを促します。しかし、自分が何に興味をもっているかほとんどわからない生徒に対しては、スマホでどのようなことを検索しているか、普段何気なく視聴しているSNSでどういった動画が流れてくるかを確認するよう促したりもします。その段階を経ても興味が思い浮かばないという場合は、他の生徒がどのようなテーマを設定しているかを比較し、社会的価値や学問的価値に重きを置いたテーマ設定につなげていきます。

また、興味・関心のあることをいかに学問的価値や社会的価値と繋げてあげられるかが教員の役割でもあると考えています。

「情報収集」の段階では、情報収集の仕方について助言をしたり、外部の探究協力者と一緒に探

したりします。また、調理や実験などを行う場合は、安全面の指導や計画の見直しを一緒に行い、実践的な学びを支える。

「情報の整理・分析」の段階では、調べたことを整理するだけでなく、自分なりの考察をもつことを重視しています。生徒が教科で学んだ知識や方法を活かして分析を深められるように、理科の実験分析、社会科のデータ読み取り、国語科の論理的構成など、各教科の視点を探究に生かすことを促しています。たとえば、理科的に「条件を変えたらどうなるか」を比較したり、数学的に割合や平均を求めたりするなど、教科の学びを横断的に活用して情報を整理できるよう支援します。

また、「なぜそうなったのか」「どのような要因が関係しているのか」といった視点で自分の考えを言語化できるように、「事実 → 理由 → 自分の考え」の構成で整理するよう促しています。こうした過程を通じて、生徒が根拠をもって自分の意見を述べる力を高められるよう導いています。

「まとめ・表現」の段階では、発表やポスター作成の段階では、探究の成果をわかりやすく整理・表現できるように支援することを大切にしています。

そのために、スライドやポスターのテンプレートを配付し、構成や見せ方の工夫を促しています。また、「タイトルでテーマが伝わるか」「結論と根拠がつながっているか」「図やグラフが見やすいか」など、まとめ方のポイントを提示しながら、生徒が主体的に発表内容を改善できるよう促します。さらに、発表練習では相互にコメントをし、友達からの視点で「分かりやすかった点」「もう少し工夫できそうな点」を共有します。こうしたやり取りを通して、生徒が他者の意見を取り入れ、自分の表現を洗練させる姿勢を育むことを目指しています。

○長期的に探究活動の時間がとられているため、早く終わる子もでてくると思います。早く終わった子に対して、どのような働きかけをされているのかも気になりました。

⇒基本的には早く終わる生徒はいません。テーマ設定の段階で、1年間もしくは2年間の探究を行えるか、調べてすぐに終わらないかを教員とチェックをしているためです。しかし、探究の進度に差はあるため、助言をいただいた専門家とは別の専門家から意見をいただく、別の調理、実験等の実施を提案、スライドの工夫や発表練習の場の設定といった活動を促すという働きかけを行っています。

○当校でもなんとか1日探究を導入したいのですが、危機管理の点から子どもたちだけをいろんな場所に向かわせることは難しいという意見が挙がります。

貴校での1日探究中の各担当チューターの動き方（危機管理の部分）について教えていただきた
いです。

⇒本校では、生徒が公共交通機関を利用して各自の探究先に向かう「1日探究」を実施しています。普段から生徒は、公共交通機関を利用し登下校をしているため、自ら計画を立てて探究先に向かっています。その中でチューターは、安全を最優先に、事前・当日・事後の3つの段階でしっかりと管理しています。

① 事前の準備

- ・生徒は行動計画書を作成し、移動経路・時間・訪問先を明確にします。
- ・学校と保護者が計画書を確認したうえで、訪問先へ学校からの依頼文書を送付します。
- ・各自にスマートフォンを携行させ、緊急時に連絡が取れるようにしています。

② 当日の対応

- ・チューターは全員の動きを確認し、連絡がない場合はすぐに連絡を取ります。
- ・学校では担当職員が全体の状況を把握し、緊急時にすぐ対応できる体制をとっています。

③ 事後の確認

- ・探究先で活動した証として、訪問証明書に記入をもらい提出します。
- ・探究後は、活動のふりかえりと安全面の確認を行います。

○④および⑤に書いたことと関わるのですが、「フロンティア大賞」というものがありました、それについて教師と生徒で投票をしているということでした。可能ならばこの審査?の観点を教えてほしいです。

フロンティア大賞を獲得した生徒がいるということは、それを獲得していない生徒がいるということです。この違いは何なのか?このことがいわゆる「探究の質」の違いなのか?ということ、つまり「探究の評価」は多くの参会者が気になった点だと考えます。「教師は子供たちの探究の学びの何を見取り、何についてどうアセスメントしているのか、」このことを掘り下げるときに、その審査の観点は参考になりそうだからです。

⇒

1. 審査の方法

審査は生徒投票と教員投票の両方で行います。

生徒は以下の①~④をもとに投票します。

- ①発表の仕方だけでなく、探究として根拠を明確に述べているか。
- ②探究内容に価値があり、自分なりの結論を述べているか。
- ③自分の興味と学問としての価値、社会に貢献する価値があるか。
- ④附属福岡中のFTの成果として、責任をもって推薦できるか。

教員は以下の①~④のように探究の過程と成果の両面から見取ります。

- ①問い合わせの質 (自分の興味・関心をもとにした問い合わせが社会や他者とつながっているか、「なぜこのテーマに取り組んだのか」が明確かどうか)
- ②探究のプロセス (計画→調査→分析→考察の流れが自分なりに整理されているか、試行錯誤の跡、失敗や工夫が見えるか)
- ③学びの深まり (得られた情報をもとに新しい見方や考えを生み出しているか、単なる調べ学習にとどまらず、自分の考察があるか)
- ④表現・発信 (聴き手に伝わる構成やデザインになっているか、図表・声・構成に工夫があるか、意欲的に発信しているか)

投票結果を総合して、最も評価の高かった発表に「フロンティア大賞」を授与します。

大賞を受けた生徒とそうでない生徒の違いは、「知識量」や「発表の上手さ」だけではありません。むしろ、

- ・自分の問い合わせを最後まで追い続けた粘り強さ
- ・探究を通して考え方方が変化したこと
- ・社会や他者との関わりの中で新しい価値を見いだしたこと

といった探究過程の質的な深まりが評価されています。

そのため、審査は「結果の良し悪し」ではなく、学びのプロセスの充実度を重視しています。

○フロンティアタイムにおいて「絶対にしてはいけないこと (禁止していること)」は何か?という点を知りたいなと思いました。

生徒の発表の中にも「東京に行って...」とか「熊本に行って...」といった発言がありました。詳細は分からせんが、探究に係る経費を全て学校が捻出しているわけでは当然ないと思います。家庭の状況によってできることできないことが分かれているということもあると思います(それが悪いと言っているわけではなく)。また、食物(食品)を扱ったり、調理および試食を伴う探究もありましたが、それも公立学校ではアレルゲンの関係で懸念される面も多いかと思います。自由に自分のやりたいことが探究できるって素晴らしいのですが、その中で学校としては制約を設けていることはどのようなことなのか、これも他校の先生が知りたいところなのではないかと考えました。

⇒

- ①安全管理上の禁止・制約

○無断での単独外出・取材・訪問は禁止

校外での調査やインタビューを行う場合は、必ず事前にチューターの承認を得て、行動計画書

を提出します。

○危険を伴う実験・取材・移動は禁止

火気・薬品・銳利物などを扱う実験、または深夜・人通りの少ない場所での活動は行いません。

○食物を扱う探究は安全管理を徹底

調理・試食を伴う場合は、アレルギー対応・衛生管理を徹底し、必ず教員立会いのもとで行います。

②研究倫理・情報管理上の禁止事項

○個人情報や肖像権の扱いに注意

インタビュー・アンケートでは、相手の氏名や顔写真を公開することは禁止です。

発表資料には個人が特定できる情報を掲載しません。

○AI やインターネットの不適切利用を禁止

AI による自動生成文や画像を「自分の成果」としてそのまま提出すること、

著作権を侵害する資料の引用・転載は行いません。

○虚偽の報告・捏造の禁止

調査結果を改ざんしたり、存在しないデータを作成することは厳しく禁じています。

○松原先生の御講演の中で「最終的には探究レベル5に...」といったくだりがありました。例えば「レベル3よりもレベル5のほうが、探究の質が高い」のか?ということについて、近くの先生とも議論になり、学校としてどう解釈しているのだろうか、と感じたところでした。あの表の探究のデザインの「質の違い」は分かるのですが、それと「質が高い、低い」ということは関連するのだろうか。

⇒

本校としては、「教科における探究」と「総合的な学習の時間における探究」の目標を明確に区別し、互いの役割を意識的に位置づけることが重要であると考えています。

総合的な学習の時間においては、生徒が自ら課題を設定し、他者や社会と関わりながら学びを深めていく過程を通して、最終的に探究レベル5（真正の探究）を目指します。

一方、各教科における探究は、教科固有の知識・技能・思考方法を活用し、教科の目標を達成することを主眼とした探究です。したがって、どの探究レベルを目指すことが最も適切かは教科や単元によって異なり、教師が実践の中で試行錯誤しながら探究の深まりを設計していくことが大切です。そのため、各教科と総合的な学習の時間を往還するような研究を意識して実践しています。

以下の文章は松原先生からいただいた回答を要約して載せています。

「探究の質は、どのレベルが一番大切なか」という問いは、よく話題になります。けれども結論としては、どのレベルもそれぞれに大切だと考えています。学校教育は、教科での学び（レベル1～4）と総合的な学習での学び（レベル5）の両方につながっています。

これまでの学校現場では、レベル1～2、あるいは3までの学びは意識されてきましたが、レベル3・4・5はあまり使われてこなかった面があり、その分、新しく、より重要なものに見えてしまうことがあります。けれども、レベル5の探究は、他のレベルでの積み重ねがあってこそ成り立つものです。一方で、レベル1～4の学びが、レベル5のためだけにあるわけではありません。これは、教科の学習が総合の学習のためだけにあるわけではないのと同じです。

文部科学省の資料などでも、教科と総合を往還しながら学びを深めていくことの大切さが示されています。だからこそ、これらをカリキュラム全体の中でどのようにつないでいくかが重要になってきます。

また、「探究の質」の捉え方にも、いくつかの視点があります。その一つが、生徒の主体性の高まりという見方です。探究レベル1～5は主体性の段階と重なっており、レベル5は生徒が学びを自分で選び、決めていく度合いが最も高い状態と考えられます。

もう一つの見方は、探究の進め方やプロセスに注目することです。科学的な探究、数学的な問題解決、技術分野の問題解決（エンジニアリングデザインプロセス）、芸術での探究（反省的思考を重視）など、さまざまな探究のプロセスを取り入れることも、探究をより豊かにすると考えられます。

そこで私は、

「探究の質（探究レベルや主体性の高さ）」と「探究の幅（探究のプロセスの多様さ）」という二つに分けて整理しています。ただし、探究の幅も含めて、広い意味で「探究の質」と捉える考え方もあるでしょう。

○ 年間のどのあたりで、総合的な探究に向けて、各教科でレベルを意識した積み上げのためのカリキュラムデザインに時間をとっていたのかが知りたくなりました。

⇒本校では、年間を通して探究的な学びにつながるような授業を実践しています。「総合的な探究に向けて」は、中高への接続を意識し、より自分事として探究を進められるよう探究学習の工夫を実践しています。最後に、「各教科でレベルを意識した～」の部分に関しては、全ての授業で探究レベル1～4に該当する授業を実践しています。